
プリンセスプリティアの冒険（200文字）

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセスプリティアの冒険（200文字）

【Nコード】

N8867R

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

パンジーから生まれたプリンセスプリティアと、アリのジョージが繰り広げる冒険です。

第一話

パンジーから生まれた小さなお姫様。

「いつのまにスプリング？」

「可愛いなあ」

「当たり前でしょ。こんなプリティーな花からブスは生まれないの」

「口が悪いなあ」

そう答えるのは、アリのジョージ。

「姫の名前は？」

「プリティア。お前は」

「ジョージ。お前とは何だ」

「気にしないで」

そう言つて花弁から滑り降りると、葉っぱの水滴で顔を洗つた。

「朝食の蜜取つて来て」

「僕は家来じゃないけど」

「気にしないで」

負けそうだなあ。

第二話

美しい亜麻色の縦巻きロールの髪、大きな二重瞼、イチゴのような赤い唇。

どこからどう見ても可愛らしいのに、口の悪いプリンセスプリティア。

パンジーの花弁の中に座っていると、美しいアニメの本から抜け出たようだ

「ジョージ、散歩に行くから案内して」

「えっ、僕は別に行きたくないけど」

「気にしないで」

この口癖が曲者だ。

有無を言わせないその態度。

まるで上から目線。

美しいドレスをたくしあげてジョージの前に飛び降りた。

第三話

気持ちのいい芝生の上をスキップしていくプリティア。

その後を面白くなさそうに歩くジョージ。

「ねえ、素敵ねえ。ここはどこ?」

「ここは山田さんちの庭」

「夢の無い言い方ねー。もうちょっと言い方があるんじゃない?」

「たとえば?」

「ウィーンの森とか、ベルサイユの庭とか」

「ここは二八坪の山田ベルサイユ宮殿の庭って、意味分からん」

「ああ、つまんない人!」

「つまなくて結構!」

プリティアが顔をしかめる。

「臭い!!」

第四話

アリのジョージはぷつとふくれた。

「失礼な！ 臭いとは！」

「だって、この匂い」

プリティアが鼻をつまみながら指さす先には。

「それは山田さんちの老犬だよ」

「ちよつとトリマーは」

「この雑種にトリマーは要らんじやろ」

「でも匂うわ」

老犬はむっくり起き上がってプリティアに言う。

「あんたもいずれは加齢臭が漂うから」

「私はプリンセスよ！ 年はとらないの！」

老犬は汚れた尻尾で二人を吹っ飛ばす。

「ぶはっ」

危うしプリティア。

第五話

老犬の尻尾で飛ばされたプリンセスプリティア。

「あれええええーっ！！！！」

「プリティアー！！！」

飛ばされた先は水の入ったジヨロの中。

「あああー！！」

アリのジョージは地面に着地、プリティアは水の中。

「大丈夫かあ？」

「ジョージ！ 助けて！」

「ようし、待ってて」

ジョージは慌ててパンジーの葉を一枚落とす。

「早く、それに乗って」

ずぶぬれのプリティアは葉っぱによじ登って一言。

「お腹すいた」

「ありがとうでしょ！」

第六話

アリのジョージがむくれながら先に行く。

「何を怒ってるの？」

「いいですか、プリンセスプリティア。人は礼節が大切です！」

「だから？」

「もういいです！」

「でしょ？ 私お腹すいてるの、花の蜜頂戴」

「あのねえ！」

「取って来て、ここで待ってるから」

「自分で行きなさい！ 元気なんだから口も体も！」
すると、プリティアはドレスを脱ぎだした。

「な、何をしてるんですか！ こんなところで！」

「着替えるの。早く行ってきて」

もう！

第七話

何がプリンセスだ！

何が着替えるだ！

今じゃなくてもいいだろう！

もう、本当に怒った！

チューリップに頭を突っ込み、汲み上げるアリのジョージ。

そっと、こぼさぬように担いで帰る。

プリティアに光がさして、縦巻きロールのヘアが風に揺らめく美しさ。

白いレースのようなペチコート姿に思わず息を飲むジョージ。

「遅ーい！」

愛らしい口から出る、憎たらしい言葉。

蜜を受け取ると、すぐに飲み干したプリティア。

「味わって飲めよ！」

第八話

腹いっぱいになると、途端にちよっかいを出すプリンセスプリティア。

「ねえ、ジョージ」

「……」

「暇よねえ」

「……」

「つまんないわ」

「……」

「遊んであげようか？」

その一言に、触角が反応する悲しいアリのジョージ。

「何してほしい？」

「おとなしく寝てください！」

「えーっ、本当に寝ちゃったらつまんないでしょう？」

「いいんです！ もう疲れてます！」

すると、プリティアが裸足になった。

「足の指でじゃんけん！」

「ないわい！」

第九話

「がおおおっ」

「ああ、どうしてこんなにでかいびきをかくの、プリンセスだろ？」

アリのジョージは少しも眠れず、目の下にクマができた。

一方、ぐっすり眠った澁刺プリティア。

「ジョージ！ いつまで寝てるの？ 起きてよ！」

「ああ、もうやつと眠れそうなのに。起こさないでください！」

「こんなにいい天気なのよ、朝の光を浴びましょ！」

「浴びたくないの！」

花卉の布団をかぶるジョージ。

「ジョージ、お腹すいた」

ああやだやだ。

第十話

眠りから覚めたアリのジョージ。

「あれ、プリンセスプリティアは？」

ベッドはもぬけの殻。

寝ているジョージに愛想を尽かしたのか、それとも餌を補給しに行ったのか。

耳を澄ますとどこかでプリティアの歌声が響いてる。

「一人で寝る時にやよー、ひざっこぞうが寒かろうっ」

よく見ると、ワインの空き瓶の中から。

「プリティア！」

「ヒューク！ よっ！ 元気がーい？」

「あああ、出来上がっちゃってる！」

「ジョージージ！」

やな言い方！

第十一話

プリティアを背負って、朝顔のツルを登ろうとするアリのジョー
ジ。

完全酔い潰れてるプリンセスプリティア。

「やっほー！」

「うるさい！」

ワインの瓶の中で反響を喜んでるプリティア。

「もう、怒った！ 二度と許さん！ 酔っぱらうなんて！」

「わあ、ジョージが二人いるう」

「いない！」

「じゃ、私も二人いるのーん？」

「二人もおつたらわしが死ぬ！」

大笑いしながらのけぞるから、ジョージの首が締まる。

「離せ！ 死ぬ！」

誰か助けて。

第十二話

ジョージは疲れていた。

とつてもとつても疲れていた。

ところが、プリンセスプリティアに二日酔いの症状はまるでない。
彼女はホントに酒が強いのだ。

「ねえ、ジョージ」

「なんですかー」

「あ、その語尾が上がる嫌な返事」

「そうですかー」

「あ、感じ悪い」

「でしょうねえー」

「折角いいこと教えてあげようと思ったのに」

「プリティアからいいことなんて期待してないもん」

「実は妹がいるの」

ピク。

ジョージは体が反応しちゃう。

第十三話

紫のパンジーの花びらの上に座っているのはプリンセスプラチナ。そう、プリティアの妹です。

「あ、こちらがアリのジョージさん？」

「そうよ」

つつけんとんに答えるプリティア。

「こんにちは、プラチナです」

「あ、どうも」

恥ずかしそうに微笑む仕草がめちゃんこ可愛いプラチナ。

ひと目で心が奪われたジョージ。

プラチナ色の縦巻きロール。

大きな二重はそっくりだけど、心が違う、心が！

「ジョージさん、お友達になってね」

ヤッタ！

第十四話

お友達になつてつて言われた。

もちろんですとも。

朝から晩まで付き合つちやうかも。

すると、プリンセスプラチナは続けてこう言った。

「この子の遊び相手が欲しかったの」

「この子って？」

スカートの陰に隠れていたのは、愛らしいベビー。

「バブバブ」

ジョージの手に渡された小さなベビー。

「娘なの、プリンセスプリンよ」

「プリンって言ったって」

プリティアは真面目な顔をして言った。

「ジョージ、大変ね。でも、私お腹すいたの」

第十五話

プラチナの娘プリンを抱いていたジョージは、遠い過去を思い出していた。

「ジョージ、お母さんはねこれからあの甘い蜜の道を辿っていくから、お利口さんにして待っているのよ」

「うん、行つてらっしゃい！」

優しいジョージの母は、そのまま帰ってこなかった。

噂によると、アリの巣イチコロに捕まってしまったという話だった。

緑の透明の檻は入ったら最後、生きて帰ったものはいない。

「バブー」

その時、目を離れたすきにプリンが！

第十六話

いつの間にかプリンが紙コップのストローの中を滑り落ちていく。

「ぎゃあああああー!!」

響き渡るジョージの悲鳴。

「キャツキャツ」

喜んでるプリン。

サイダーの飲みかけにダイブ！

あまりの軽さに浮いている！

「バブー！」

一方、ジョージは助けるために紙コップにダイブ。

「よーほっほっほー！」

叫びながらサイダーの中に。

笑ってるプリンの横を沈んでいくジョージ。

その時風がコップを倒す。

助かったジョージの背中でプリンが笑う。

第十七話

プリンを連れてジョージがプリンセスたちのところへ。

「もう、こりごりです」

「あら、どうして？」

「大体、母親が面倒をみるとしたもんです！」

「そうよ、プラチナ！ ジョージは私のものよ」

「プリティアが口をとんがらせて言います。」

「違います！ 私は誰のものでもありません！」

「疲れ切ったジョージの手を握りしめるプリン。」

「おお、プリン！」

「あまりの可愛らしさについ抱き上げてしまうジョージ。」

「ほら、プリンも懐いてるし」

「むむ。」

第十八話

プリンセスプリティアがこの家の飼い犬のところへ行くと言う。

「一人で行って下さいね。私はプリンのおむつを替えています」

ジョージが手慣れた様子で替える。

「つまらないなあ、一緒に行こうよ」

「ダメです、これから昼寝の時間」

「あなたねえ、私の相棒でしょ？ プラチナは？」

「離乳食作ってます。ねーんねん、ころーりよー」

添い寝するジョージ。

「ふん」

お尻を振りながら出かけるプリティア。

早速イケメンアリに声を掛けられた。

第十九話

「へーい、プリティア！」

「あんた誰？」

「俺は白アリバクスターさ」

「わ、やだあ」

「何が？」

「白いのは悪でしょ？」

「人聞きの悪いことを。君の家なんか腹の足しにもならん」

バクスターはそう言うと、プリティアの前に跪いた。

「私がお伴しますよ。花の蜜だつてたつぷりと汲んできますよ」

「あら、そうお？」

どこかで、誰かがこけた音がした。

アリのジョージ。

心配でそつと後を追ってきたら、いとも簡単に誘惑されるプリティア。

第二十話

犬のベンがつまらなそうに首を掻いている。

怖いもの知らずのプリティアはベンの背中に飛び乗った。

「シャンプーした毛が気持ちいいわ」

ベンの背中をゴロゴロするプリティア。

白アリバクスターも一緒に飛び乗る。

「ほう、確かにいい気持ちだ。一緒にこの犬の尻尾で休まないかい？」

怪しい誘いにジョージは気が気じゃない。

慌ててプリティアの元へと。

その時、ベンのくしゃみ。

「ふえーつくしょん！」

プリティアの前を飛ぶジョージ！

第二十一話

目の前を飛ぶジョージを見たプリティア。

「ジョージ！ 一人で遊んじゃズルーイ！」

「遊んでるんじゃない！ 飛ばされてるのー！」

アリのジョージが叫んでもプリティアには聞こえてない。
プリティアはジョージを追いかける。

「ズルイズルイ、空を飛ぶなんて！ 私もやりたーい！」

スカートの裾をひらひらさせながら追う姿に、バクスターまでついて来る。

「おーい、プリティア、どこ行くの」

飛ぶ飛ぶジョージ、彼の軽さが身を救えるか？

第二十二話

ベンの水入れにウォーターシュートのように綺麗に着水するジョージ。

「ジョージ！」

「はい」

「ねえ、これからベンの犬小屋に行こうよ！」

「いやです！ ノミのたまり場みたいなところへ行くなんて」
「行こうよ、きっと楽しいよ、暗くて」

すると、白アリバクスターがささずこ言った。

「プリティア、僕が暗いところへ連れて行ってあ・げ・る」
「ホント？」

耳がダンボになったジョージ。

「ダメです、絶対ダメ！」

二匹の間に火花！

第二十三話

プリティアの長い髪が風になびく。

すぐ後ろをバクスターとジョージが早足で後を追う。

「ごほごほ、何？ この煙」

「ああ、これは犬の蚊取り線香さ」

ジョージが笑いながら言う。

「蚊取り線香？」

「そう、フィリアアって病気にならないようにね」

白アリバクスターはヨタヨタしながらプリティアの方へ倒れ込む。

「どうしたの？」

プリティアの胸に抱かれていい気分のバクスター。

ジョージが慌てて払いのける。

「寝かしといたらいいの！」

第二十四話

白アリバクスターがへたばってるので、アリのジョージは安心してプリティアと進む。

「ジョージ、お腹すいた！」

「ほら、そこにフリージアが咲いてる。美味しそうな蜜があるはず」「わーい」

喜んで急に元気になるプリティア。

「まだ、子どもだなあ」

微笑むジョージ。

するとフリージアに頭を突っ込んだプリティア。

ジョージの顔が引きつった。

プリティアの愛らしい唇に男の唇がくっついてきた。

「あ、ごめん。僕、花の王子ハニーさ」

第二十五話

アリのジョージが卒倒しそう。

「何やってるんですか！」

ワナワナ震えるジョージ。

一向に気にしないプリティアは、ハニーに向かってにっこりほほ笑む。

「私はプリンセスプリティアよ」

「可愛いなあ。僕のお嫁さんになってください」

「そうね」

「ええええええええええーっ！！！」

ジョージは泡を噴いて倒れる。

「ジョージ、結婚って楽しい？」

「あのねえ！」

「じゃ、プラチナみたいに子どもだけ作る！」

「絶対ダメーっ！！！」

第二十六話

ハニーがいろいろとプリンセスプリティアに貢物をし始めた。

「これもそれも、あなたのためなら」

「ふーん」

退屈そうなプリティア。

「もらって嬉しいのって初めだね」

「そんなー」

「それより、ジョージはどこかな」

「あんなアリなんか放っておいて、僕とリツチな蜜の時間を過ごしましょう」

すると、妹のプラチナが娘プリンを抱いて登場。

「ジョージはどこ？」

「子守りじゃないの？」

「昨日からいないの」

「一人で冒険ってズルイ」

第二十七話

プリンセスプリティアは辺りを見回した。

「いたー！ ジョージ」

ジョージはネコジャラシの毛で足裏マッサージ。

「面白そう、私もやろうつと！」

すると、ジョージはスルスルと滑り降りる。

「じゃ、これで」

「ひどいひどい！ ジョージ！ どうして私から逃げるの！」

「私は一人で静かに暮らします。では、さようなら」

「きやあああああー！！！」

ひっくり返るようなプリティアの悲鳴。

駆け寄るジョージ。

ニコツと笑って掴むプリティア。

第二十八話

プリンセスプリティアの白い指がジョージの足を掴んで放さない。

「何をするんですか！ 放してください！」

「やーん」

「何がやーんだ！」

それを見ていた白アリバクスターは、プリンセスプラチナに方向転換。

「僕は一人の女に固執しないの。プラチナ、どこかで遊ばない？」

「バブー」

娘のプリンがバクスターの足の間を通り抜ける。

「この子の子守りをしてくれるなら考えてもいいわよ」

残ったハニー。

「ちよっと、それおかしくない？」

第二十九話

あ、なんとお気に入りのパンジーにダンゴ虫がのってる。

「あああ、ジョージ！ 花卉に虫が！」

「大丈夫だよ」

怖いからのけてという言葉に期待していたら、いきなりプリティアはダンゴ虫を蹴りあげた。

「とおっ！！」

吹っ飛んだダンゴ虫。

その威力に思わず震えあがるジョージ。

「プリティア、なんとまあ」

手をブルースリーのように構えるプリティア。
くるくる回り続けるダンゴ虫。

「ねえ、怖かったねえ」

「それはあちらの台詞です！」

第三十話

スキップしながら花から花へといくプリンセスプリティア。

あの姿を見ていると、本質が見えなくなる。

「惑わされてはいけないのだ!」

ジョージは心を落ち着かせようと水溜りに目をやる。

すると、これまたそっくりのプラチナがプリンと二人で水遊び。

可愛すぎるが、これも見誤る危険性がある。

「瞑想にふけることにしよう」

ドーン!!!

「ごほう、だ、誰だ!」

ジョージの腹にダイビングしたのはもちろんプリティア。

「お腹すいた!」

第三十一話

プリティアが珍しくおとなしい。

「どうした？」

「ふえーつくしょーん！」

ああ、見るも無残な鼻水が垂れる。

「か、花粉が……くしゅん！」

「ええっ？ 花粉症？」

「わかんないけど、急にくしゃみばかり、鼻水も」

ああ、鼻の下が真っ赤になってる。

目もしよぼしよぼ。

「あのねえプリティア、あんたは花から生まれたんじゃないの？」

「そうれふ、ふえーくつしょん！」

くしゃみでジョージが宙に舞う。

「それがアレルギーってどうよ！」

第三十二話

プリティアが念入りにドレスアップしてる。

「どこいくの？」

「あ、ジョージ。花のプリンセスコンテストがあるの」

「へえ、どこで？」

「ハニ一の宮殿」

「また、いい加減な話じゃないの？」

「でもいいの。退屈してるから」

「あのねえ、プリティアには警戒心つてもものがないの？」

大きな瞳でジョージを見つめるプリティア。

その可愛らしさに倒れそうになるジョージ。

次の瞬間。

「ふえーつくしゅん」

鼻水たらーり。

誰も寄りつかないわ。

第三十三話

いよいよフラワープリンセスコンテスト開催。
厳選された出場者。

一番はガーベラ嬢、とってもセクシー。

二番はキンセンカ娘、仏壇に置きたい雰囲気のとやかさ。

三番はサクラジェンヌ、着物姿がよく似合う。

四番はカラー姉妹。すっきりした大人の雰囲気を醸し出す。

出た！ 五番はプリンセスプリティア。

お目目ぱっちり、愛らしい顔立ちにヒラヒラフリルのシュガーピ
ンクのドレス。

大興奮の客席。

裏でジョージが祈る。

「隠し通せ！」

第三十四話

プリティアはお尻フリフリして歩く。

そうだ！ その調子だ！

だが、審査員のコオロギの質問が問題だった。

「あなたが一番気にいつてる格言はなんですか？」

「格言？」

ああ、そんな質問、プリティアにするなんて。

「えーと、立っている者は親でも使え！」

「は？」

もう、プリティアに向いてないし、その質問。

「では、尊敬する人は？」

「アリのジョージ！」

ウルウルしてきたジョージ。

「理由は？」

「すぐ動いてくれる！」

もう帰ります！

第三十五話

怒りながら帰って来たプリンセスプリティア。

「残念でしたねえ」

ニヤニヤしながらジョージが話す。

「フン、いいもん」

優勝はサクラジェンヌだった。

知性あふれる回答がコオロギにアピールしたようだ。

「私の方が絶対勝ってるはず！」

「何を根拠に？」

「だって、水着審査がないなんておかしいわよ」

「確かに。自信があっただんですか？」

「これ着るつもりだったの」

そう言いながら見せる水着。

生地がほとんどない……。

「見たかった」

第三十六話

「トウルリラ〜トウルリラ〜」

鼻歌でジョージが塀を踊りながら歩いていく。

「どうしたの？ 何か面白いことでもあったの？」

プリティアは追いかけて聞くが、ジョージは答えない。

「ねえ、ジョージ、何なの？ 教えてよ」

無視していくジョージ。

ここで止めておけばよかったものを、つい調子に乗って続けたジョージ。

ピューン！

プリティアの楊枝攻撃開始。

「ひー！」

「早く白状しなさい！」

「もう！ 恋人できたの！」

プリティア失神す！

第三十七話

プリンセスプリティアは花卉の上で寝かされていた。

「大丈夫？」

「あ、プラチナ。ジョージは？」

「ジョージは式場探しだつて」

「えーっ、本当の話なの？ 相手はどこのこといつよ！」

「なんで、プリティアが怒るのよ。めでたい話じゃないの」

「フン！」

プラチナに抱っこされてるプリンが、突然両手を上げて喜んでい

る。

ジョージが来たのだ。

「はい、プリンちゃん。お土産の蜂蜜キャンディだよ」

「私には？」

どこまでも腹の減る女です。

第三十八話

アリのジョージは満面の笑みです。

プリンセスプリティアは面白くない。

「さてと」

「ちよつと、ジョージ」

「は？」

「誰と結婚するの？」

「いやあ、噂は広がってますね」

「そんなこといいから、相手は誰？」

「あれ、気になりますか？」

「別に」

「でしょう。僕忙しいから失礼」

そう言つと、ジョージはいそいそと出かけて行つた。

「あつたまきた！ 何よ、あれ！」

地団太踏むプリティア。

「絶対見つけてやる！」

ジョージの尾行開始です。

第三十九話

アリのジョージが向かった先には、あの仏壇が似合いそうなキンセンカ娘がいた。

「えっ、ジョージ、あの話題のなさそうなキンセンカ娘なの？」
隠れながら進むプリンセスプリティア。

「何話してるの？ 聞こえない」
パンジーの花を持って、匍匐^{ほふく}前進でいくプリティア。

「キンセンカ、僕の選んだ指輪のデザインはこれなんだけど」
「素敵よ」

「そう？」
「ピツタリ」

「えっ、指輪？ 婚約指…輪…」

オオイヌノフグリデザインだ。

第四十話

キンセンカ娘と肩を並べて歩くジョージ。

プリンセスプリティアは意気消沈と思いきや、さらに尾行を続ける。

「キンセンカ、今日はどうもありがとう」
「どういたしまして」

急に振り返るジョージ。

プリティア、あわてて水溜りに飛び込む。

チャポン。

キンセンカは気付かず手を振って別れる。

ジョージはニヤニヤしながら水溜りを覗きこむ。

「そこのお嬢さん、なんで汚い水溜りで泳いでるの？」

「ブハッ、べ、別に！　ここで泳ぎたいの！」

第四十一話

プリンセスプラチナとプリンが鼻をつまんでいる。

「くちやいわね」

「バブー」

「フエーックショーン！！」

汚い水溜りに飛び込んだプリティアが放つドブの臭い。

「早く着替えなさいよ、臭くてたまらないわ」

「バブー」

ズルズルと鼻水も垂れてくる。

「ああ、きつたないプリティア、早くシャワーを浴びてよ」
「うん」

頭の中から足の先までシャワーを掛けるプラチナ。
されるがままのプリティア。

「頭でも打ったの？」

静かなのが怖い。

第四十二話

プラチナがプリンを抱いてアリのジョージの元へ。

「ちよつとジョージ」

「ダメ、今日は子守りできない」

「違うの！ 話があるの！」

「なーに？」

「プリティアが変よ」

「いつもじゃないか」

「違うのよ！ 普通じゃないの」

「元々普通じゃないだろ」

「臭くて元気がないの」

「それはドブに落ちたからだろ」

「それはそうだけど。話を聞いてあげて」

「だから言ったでしょ。僕は忙しいって」

「あ、意地悪な言い方！」

「元からなのよ」

変よ！

第四十三話

アリのジョージはプリティアの姿をちらつと見に行った。

プリティアは足を投げ出して大の字で寝ている。

「何だよ！ 意気消沈してるんじゃないのか」

そこへ、白アリバクスターが花束を持って来た。
隠れるジョージ。

「プリティア、もうそろそろ僕らも結婚発表した方がいいんじゃないかな
い？」

「そうね」

「ええええええっ！」

思わず悲鳴をあげるジョージ。

ふとジョージを見つめるプリンセスプリティアの美しさ。

「プリティア」

「ジョージ」

第四十四話

一歩ずつ進むジョージとプリティア。

手を握りあ……わない。

プリティアが握ったのは、バクスターの隠し持ってた特製蜂蜜。

「どこのなの？」

「これ、美味しいよ！」

「一度食べたことある。ねえ、ジョージ、美味しそうよ」

アツタマニキタ！

ジョージは頂垂れて、沸騰しそうな頭をやっとのことで持ち上げた。

「プリティア、僕はオオイヌノフグリの指輪を……」

「キンセンカにあげるんでしょ？」

「あの花、別名を星の瞳って言うんです！」

第四十五話

プリンセスプリティアははっとして、ジョージを見た。

「星の瞳って、きれいな私のこと？」

「い、いや、その……」

「違うのね」

「だ、だから」

そこへお邪魔虫の白アリバクスター。

「そんなことより、この蜂蜜を舐めてみてよ」

楊枝にたっぷり巻き付けてプリティアに差し出すバクスター。

「美味しそう！」

「美味しそうじゃなくって、美味しいの！」

堪らずジョージが叫んだ！

「プリティア！」

と同時に。

「毎度お騒がせちり紙交換です」

第四十六話

大事な話をしているときにやってくるちり紙交換。

「プリティア」

「ジョージ」

「ご家庭にご不要になった段ボール、古着、雑誌がございましたら、多少にかかわらずお手をおあげください」

イライラするジョージ。

しかも、この家の前で止まった車。

せつせと家の人々が花壇の前を行き来する。

雑誌がたくさん出されている。

ピラーツと風で捲れたページ。

「アハン、ウフン」

いけない場面連発のグラビアに、プリティアの興味はそちらに移動。

第四十七話

ジョージが目の前のエロ雑誌を閉じる。
プリティアが呟く。

「あ、面白そうなのに」

「僕の話の方が大事なの！」

「そう」

「そうです！ プリティア、僕はアリだけど」

「知ってるわ」

「話の腰を折らないで！」

「うん」

「ぼ、僕の指輪を受け取ってください」

「無理」

「へ？ なんでそういとも簡単に……」

「キンセンカに先に見せた」

「それは相談に乗ってもらって」

「なんで私じゃないの」

「それじゃ、相談にならないでしょ」

「なんか話が変。」

第四十八話

プリンセスプリティアとアリのジョージが真剣に話をすると面白くないのが白アリバクスター。

「ちよいと、ジョージ。どいてくれよ。蜂蜜食べてもらうんだからうるさい！」

「失礼だな！ うるさいとは！」

「大事な話があるんだから！」

「僕だって、プリティアに大事な蜂蜜を食べてもらうの」

するとプリティア、ひよいと蜂蜜を取ってペロペロ。

「大丈夫、食べながら聞く」

「あんたねー、僕が真剣な話をしているときに蜂蜜舐めるの？」

第四十九話

蜂蜜をペロペロ舐めながらのプリティア。

アリのジョージがその様子をじっと見ている。

「プリティア、そんなことしてる方が君は似合ってるね」

「ん？」

「結婚なんて考えたことないでしょ？」

「あるよ」

「そう？ どんな風に？」

「あのでっかいウエディングケーキを食べるの」

「はあー、他には？」

「料理がいっぱい出るの」

「食べることだけなのね」

「うん、ジョージは？」

「愛しい奥さんと朝食」

「同じじゃん」

朝食は別の意味も……。

最終話

プリティアは蜂蜜を舐めながらこう言った。

「指輪を見せて」

「えっ？ これだけど」

「はめてみて」

「えっ？」

白い薬指にピタッとはまるオオイヌノフグリのデザイン。

「いいかも」

「プリティア、この指？」

「私って何でも似合うね」

「うんうん」

「じゃ、もらってあげる」

「へ？」

涙目のジョージ。

「私、大食いよ」

「知ってる」

「わがままよ」

「知ってる」

ジョージにもたれ左に指輪、右手に蜂蜜のプリティア。

花言葉は信頼。

ま、
いい
か。

最終話（後書き）

楽しんでいただけましたか。

これにてプリンセスプリティアとアリのジョージの活躍は終わります。

たくさんの方に読んでいただいております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867r/>

プリンセスプリティアの冒険（200文字）

2011年5月5日10時40分発行